町史とっておきの話 267

同時代史料が語る只見の歴史⑥

矢澤家旧蔵の陶磁器（2）―江戸時代の商品流通―

福島県中世史研究会
柳内　壽彦

北越三条

眼家具蘭曳（目薬をつくる道具）の木箱の蓋の裏に「文政六歳（一八二三年）未四月北越三条駅ヨリ求之　千秋堂惟徳（矢澤玄説）」と記されています。この墨書銘は、眼家具蘭曳の購入先を示しています。越後の三条（新潟県三条市）は、蒲原平野を流れる信濃川の要衝に位置し、物資の集散の河港都市でした。三条には問屋が立ち並び、新潟、長岡、高田、柏崎、佐渡等すべての越後商人は皆三条に仕入れにやって来ました。三条に町名年号の記載を欠く『家数渡世控』という記録があります。この記録には、材木渡世、木挽きが多いので、木場のあった二ノ町か二ノ町を含めた隣接町内と考えられています。この町内には、材木渡世、木挽き、大工、仕立屋、建具屋、呉服渡世、煙草切、医師、そして陶磁器を扱う瀬戸物屋など実に六四種の職業に従事した人々が生活していました。瀬戸物屋は二軒ありました。

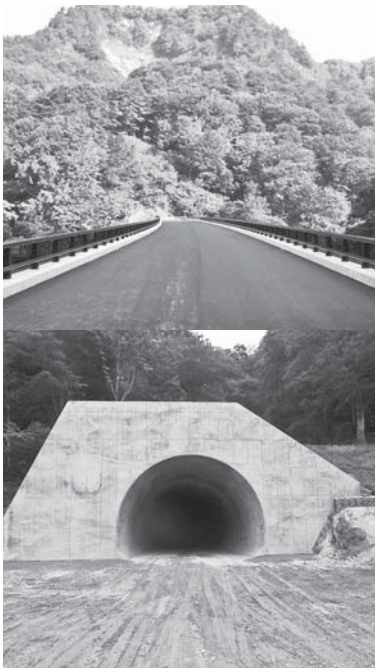
▲蘭曳を入れた木箱のふたにある墨書

八十里越

三条から只見方面には、商品を積み五十嵐川を遡上して下田郷（旧南蒲原郡下田村・現三条市）で荷揚げをし、背負いなどで八十里越を通って運びました。只見方面の村々は若松城下から遠距離にあったので、三条などの越後の在町に依存する度合いが高かったのです。山国である会津にとって塩は不可欠の産物でした。寺泊で買い上げられた塩の会津への道は、八十里越と阿賀野川沿いと二つのルートがあり、そのいずれにも三条商人が関係していました。八十里越は天保十四年（一八四三年）に牛馬が行き違いで通れるように道幅が二間に拡張され（現在このルートを古道と呼ぶ）、越後への物資の輸送路として重要な役割を果たすようになります。越後へは麻、煙草、鳥もち、薬用人参、蚕種などが搬出され、只見方面には塩のほかに魚介類、鋸、鉈などの金物、三条の櫛、かんざしなどの小間物が搬入されました。

現在の叶津、只見、黒谷、田子倉などの集落を含む黒谷組の『文久二年（一八六二年）出金入金調』によると、若松方面より塩物、瀬戸物、畳表などを、他邦よりは木綿、古着、小間物類、魚類、鉄類、合羽、塩、茶、売薬、竹などを購入しています。出金方（支出の部）の金額をみると、若松方面は全体のわずか一・五％弱にすぎず、大部分は他邦つまり越後、江戸・関東方面でした。只見の経済は越後への依存度が高かったようです。

一五の木箱墨書銘陶磁器のうち一一は肥前産（佐賀県）の磁器です。これらは日本海から信濃川の河港都市三条、そして下田郷より八十里越で運ばれてきました。またおろし皿や燈明皿などの会津本郷産の陶器は若松方面から運ばれました。若松方面からは他に瀬戸（愛知県瀬戸市）など東海地方産の陶磁器の搬入も考えられます。天保十三年（一八四二年）、会津藩の駅方役所からの問い合わせによる猪苗代湖西岸の船着き場の戸ノ口・篠山の問屋の報告によると、湖上漕運による東入り商品一四種の中に瀬戸物が入っています。只見方面への陶磁器の搬入ルートは二つあったのです。



▲全通に向けて工事がすすむ八十里越（４号橋梁と７号トンネル）（写真提供）長岡国道事務所

只見町の新時代

大正に入ると鉄道・道路の整備が進み、只見地方の経済のつながりは会津盆地に移行してゆき、昭和初期には八十里越で物資を運ぶ人馬の往来はなくなるのです。現在、只見町と三条市を結ぶ国道二八九号線の工事が進められています。これが完成すると、只見町は江戸時代のように経済・文化の面で新潟県との交流がまた復活し、只見町の新時代が到来すると思います。